

ヘーゲル「主観的精神論」研究：精神における主体の生成と条件

著者	池松 辰男
学位授与年月日	2017-02-16
URL	http://doi.org/10.15083/00075433

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 ヘーゲル「主観的精神論」研究——精神における主体の生成と条件——
氏名 池松辰男

1. 論文の課題

この論文は、精神における主体の生成とその条件を巡る問題をめぐって、ヘーゲルの『エンチクロペディ』の「主観的精神論」に基づいて読み解く試みである。

一般に、ヘーゲルにおける「主体」概念は、もとより哲学史上のいわゆる認識する「主観」概念に単純に還元されうるものではない。とはいえそれはまた認識活動を構成する意識／思考のありかたに対する理解なくして成り立ちうるものでもない。ところが、まさにそれに対するヘーゲル自身の理解が示されているはずの「主観的精神論」への顧慮は、従来のヘーゲル哲学研究ならびに哲学研究一般において必ずしも充分ではなかった。それに対し、この論文はまさにそのヘーゲル自身の理解した精神における主体のありかたと、そこから導かれる帰結とを剔抉することを目指している。その意義はたんに研究史上の落丁を補うことにあるのではない。

「主観的精神論」の特徴は事柄をその生成の相から捉え叙述することにある。まさにそれゆえに、それは認識活動を構成する意識／思考のありかたそのものへの視線とともに、そのありかたを準備するところの、それ自身は意識でも思考でもないありかたへの視線をも含むものとなるのである。ゆえに、それを辿り直すことは、哲学史上の〈主体〔主観〕〉概念そのものを巡る再考にとっても、十分に意義のあるものとなるであろう。

2. 論文の内容

ヘーゲルの「精神哲学」は、批判哲学以降の〈自我〉を巡る難題、すなわち自己意識の自己関係に随伴する循環の問題への一つの応答と見なせる。ヘーゲルはこの問題に対し、精神をして固定した主^{ズブイェクト}語としてではなく、自己を経験可能な領域にもたらしつつそれと関係するなかで自己を認識するもの、すなわち活動する自己関係たる主^{ズブイェクト}体として捉え叙述することで答えようとする。しかるに、この応答の試みの劈頭をなす「主観的精神論」の課題とは、精神がいかんにして（所与の自然とまだ分化されない状態から出発して）自己をまさにその主体として顕わにするに至るのか、その実際の過程を（「人間学」「精神現象学」「心理学」の三つの段階を通じ）開陳することにある（以上本論第一部第一章・第二章）。

その「主観的精神論」の展開構造には或る固有の特徴がある。すなわち、ヘーゲルは「主観的精神論」の最初の段階「人間学」と最後の段階「心理学」とで、一箇同一の過程を反復して

いる。その過程は、精神が端的に没意識的なものに関係する境位から出発して、意識／思考のありかた一般の条件を形成することへと転換してゆくという構造をとる。この過程を、一方では意識の構造成立以前の精神の原初的発生の水準（「人間学」）から、他方ではその意識の構造のもとにありつつ対象の認識活動をつねにすでに媒介している精神の共時的・現在的な水準（「心理学」）から、ヘーゲルはそれぞれに考察しているのである。この、いわば二段構えからなる「主観的精神論」のうちに読み取られる意義は、以下の通りである。

（1）精神の没意識的境位の意義とその取り扱い方式の提示

ヘーゲルの見る限り、精神が最初に主体として自らを示すのは自己意識においてではない。精神の原初的発生の水準、あるいは精神がなお自然のうちに沈潜している段階を取り扱う「人間学」においてである。すなわち、感覚内容を意識の構造成立以前に保存する働き（「感じる魂」）を通じ、その保存した非現前的な感覚内容（「感情」）を自己自身の感情として持つありかた（「自己感情」）こそが、精神における主体性の始まりにほかならない。感じる魂の定位するこの境位（〈堅坑〉）の特徴は、その端的な没意識性にある。この境位そのものは「心理学」にも登場するが、意識の構造を前提とする「心理学」においては、この境位にはたんに表象を形成する素材（「像」）の源泉以上の意義は認められない。それに対し、「人間学」においては、あるいは精神の原初的発生の水準においては、同じこの没意識的境位は、精神における主体性の始まりの位置を指し示すものとして固有の意義を持つのである。

とはいえ、ヘーゲルによれば自己感情はまた、たとえるならば、自らの関係する個々の感情に取り憑かれてしまってもいる。自己感情は、構造そのものとしてはほぼ同じである自己意識とは違い、一般に自らの関係するものを意識において対象化することができないからである。ゆえに、すでに意識の構造を得た精神のこの段階への回帰は、精神における世界の対象性の喪失、あるいは精神の「病気」を帰結する。けれどもまさにそれゆえにかえって、この精神の病気の考察を経由することで、意識以前ゆえに直接には考察の対象とすることができないこの段階を取り扱うことも、同時に可能となるのである（以上本論第二部第一章）。

（2）身体論の提示と他者論・言語論との関連付け

「主観的精神論」にはまたヘーゲル独自の身体理解も示されている。ヘーゲルは精神と身体とを実在的には同一のものとする。だが、両者の同一的なありかたは当初は所与の自然のありかたに依存するものであり、その限りで精神は所与の自然になお沈潜していると言われる。それに対し、所与の自然に対する精神固有のありかたの現れは、この同一的なありかたの様式そのものの組み換え、すなわち身体を巡る或る持続的・規則的な行動様式（「習慣」）の形成のうちに、見てとられることになる。

この身体理解は直接に示されるのは「人間学」においてであるが、その帰結は「主観的精神

論」全体に貫かれている。第一に、ヘーゲルにとって、習慣を経た身体は、精神における他者関係、とりわけ「承認」と「所有」の条件をなす。精神は習慣を経た身体においてのみ、他者に対して現に存在するものとなるのである。第二に、ヘーゲルにとって、精神の完全な表現は「言語」であるが、それは言語においてこそ精神の自己関係的なありかたがもっともよく現れ出るからである。しかるに、その言語を構成する契機（記号を作る働き／声の分節化）の原型は、まさに習慣を経た身体の一つの側面（「形姿」＝「記号」としての身体／「道具」としての身体）のうちにある。かくして、「主観的精神論」においては、精神の完全な表現を含む精神の存在様式は、つねに習慣を経た身体のそれと同じ地平のうえに見られているのであり、精神は、自らがその原初的発生の水準において経過したのと一箇同一の過程を今度は意識の構造のもとに反復することではじめて、言語に定位する自己関係的思考、すなわち主体として完成するのである（以上本論第二部第二章）。

（3）意識／思考の成立条件としての精神の^{メカニスムス}〈機械制〉とその帰趨の提示

上述の地平はまた、『法の哲学』における人倫のありかたとも連続している。ヘーゲルの見る限り、習慣も言語も人倫も、ともに所与の自然に対する精神自身による措定の所産、すなわち〈第二の自然〉にほかならないからである。しかるに、この〈第二の自然〉の成立、あるいは精神における意識／思考の境位の成立は、精神の^{メカニスムス}〈機械制〉と呼ばれるありかたを条件とする。上述の精神における主体性の始まりがその没意識性において抱え込む〈純粋な不安定さ〉は、習慣および言語の形成のもとで、構成要素の相互無関心性をその本質とする機械的なありかたへと供されることでのみ〈安定した死〉を得ると、ヘーゲルは理解するのである。だがまさにそれゆえに、精神はまた社会の構造の変化とともに顛倒する可能性をも孕むものとなる。たとえば、近代市民社会（精神の教養形成が実際に推移するのはここである）における分業の進行は、労働の熟練を極度に機械的なものにして、最後には労働そのものを端的な機械で置き換え労働者の存在を不要とする。近代市民社会に伴うこの否定的帰結は、精神をまさに主体にする条件そのものと表裏一体なのである（以上本論第二部第三章）。

（4）精神における主体のありかたを巡る更新の余地の提示

一方また、精神にはその既存の人倫のありかたとそれに伴う主体のありかたそのものを新たにする局面も備わっている。それはヘーゲルにあっては歴史である。ヘーゲルの見る限り、歴史の展開を媒介するのは「歴史的個人」であるが、彼らに共通するのはその「情熱」である。一般に、「情熱」とは精神が或る特定の衝動に自らの一切を擲ち沈潜することである。しかるに、「主観的精神論」の講義の変遷を追う限り、ヘーゲルはあきらかに、この情熱をして、精神の病気の形態の一つにして自己感情そのものの裏面＝「狂気」と同じ水準にあるものと見ていた。ゆえに、ヘーゲルの言う歴史的個人とは、（既存の人倫のありかたと密接に結び付きながらも）情熱を通じ自らの原初的発生の水準における主体性の始まりの位置にまで回帰することで、精

神の没意識的境位から新たな「世界関係」を汲み出す存在なのである。精神自身には自らのあの〈豎坑〉のいわば深さを測りきることはできないとするヘーゲルの認定も、こうした精神における主体のありかたの更新の余地を示唆している（以上本論第二部第四章）。

かくして、「主観的精神論」の帰結は、精神における主体の生成を可能とする条件とともに、その主体自身がまさにその条件のもとに自らを顛倒させつつ更新してゆくありかたをも指し示すものである。「主観的精神論」が提示するのは、まさにこうした、自らを不断にさらに新たに生成してゆく主体の実相にほかならない。——「主観的精神論」におけるヘーゲルの思考は、近代哲学の陸地たる意識／思考のありかたの意義をめぐって、その理解の深化と再考とを同時に促すものとして、確かに広範な射程を持ち合わせているのである。